



第10号

さらしなほの里



2004・春

「友の会」だより

更級小に御柱が鎮座？



明治七年（一八七四）に更級小学校の前身、鼎立学校が発足し、平成十五年が一三〇周年でした。節目の年にプールに続いて新しい校舎が出来あがりました。三十五年前、木造校舎からコンクリート校舎に建て替えられました。前の校舎のときのように

昇降口に化粧柱が計画されていましたが、それに使えないかとなったのでした。化粧柱になる木は平成十四年秋、冠着山の財産区で杉二本が見立てられ、冬に伐り出され学校へ運ばれてきました。そして三学期の終わり、森林組合で竹べらを用意していた

だき、各学年・学級で皮はぎしました。

伐り出してから一年近くたった十五年の十一月、昇降口に化粧柱として建てられました。柱には塚田

に、地域の方々による寄附というわけにはいきません。改築が始まってまもなく、財産区から地元の木を使ってもらえないかとの申し出がありました。ベンチ、あずま屋などいろいろな案が出ました。設計の中で

哲男さん、西野入誠一さんに教えていただき、防腐や艶出しによいと柿洪が塗られました。校舎改築にご理解、ご協力、ご支援をいただきまして、心より御礼申し上げます。

（前更級小校長・大橋昌人）

物つくる喜び子に伝えたい



須坂市の歴史好きの知人から「ことは縄文まつりはないの？」と聞かれた

昔ミシン操作、今は縄文編み物

二〇〇三年十月二十七日に行われた第十一回のまつりで私は、前年同様編物担当。係はまだ初心者なので周

りの人の助けを借りて。

た。「合併して千曲市になったからどうなんでしょうね」。その後さらしなの里歴史資料館から封書が届き、「ことしもあるから楽しみにして」と電話する。

興味をもつのは子ども。ほとんどが低学年、幼児。その親たちはかたわらに居て、たまに手をだす人もおられたが、年齢の高い人は「ああ、ムシロ編むのと同じ」と懐かしそうにしていた。

そもそもこのまつりに参加したあの日のことを思い出す。資料館で見たさまざまな遺跡の資料、遺品、写真：実際に縄文時代そっくりの服装を見て、感激した。

子どもたちとは楽しく接した。「私はバアちゃん先生ね」と話しかけ、学校のこと、友だちのこといろいろ。その間にも編物は進んでいく。「もっと長くする」「これ

今ならば「ボロ」と思われる出で立ち。しかし、よく観ると一つ一つ精魂込めた品々に、遠い祖先のたゆまぬ技の継承、そして「愛」というものがある。



位かなあー出来たら花瓶敷、それとも可愛い写真貼るかなーいいなあ、夢をいっぱい持つてねー」。

昔、大勢の子供たちにミシン操作を教えていたので、物を作るといふ喜びは共通していると思います。また、この交流を通じて、よい影響を与えたかどうか反省しながら、今後のさらしなの里の発展を祈ります。

(山本孝子・長野県高山村在住)



春まだ浅い三月二十一日、新潟県糸魚川市の地球博物館「フォッサマグナミュージアム」への研修旅行に一緒させてもらい、一日お世話になりました。館内では地球の誕生から人間と石とのかかわりの歴史などが紹介されています。

博物館の隣には縄文時代の長者ヶ原遺跡があり、どんなに生活が便利になろうとも原型に触れることの大きさがここでも感じられました。集落も大きく、安定した生活が長期間続いていた様子。どんな日常会話をしていただろうね。今の自分に置き換えて受け止める。想像がふくらんで来る。

(小山好子)

市場で人気の㊦りんご

ちくま農協更級支所の敷地の一角にあ

る「更級農協」と㊦の大文字が気になっていました。更

級小学校体育館脇の県道に面した建物の

正面にその字はあります。

友の会副会長の堀内

本啓さんと、ちくま農協更級支所長の塚田利勇さんに教えてもらうことができました。

この建物は昭和二十三年に農協法ができた後に、りんごの集荷、箱詰めのために作られたそうです。

「先人が山から落ち葉を集め、べとにすき込んで」（塚田さん）作ったリングゴ畑で成った実は、市場で「うんと欲しがられるようになった」ため、㊦の荷印で産地を

明確にするようになりました。㊦はもち

ろん、更級の「さ」です。

それ以前は個人やグループが畑や家の近くで自分たちで箱詰めする場所を設け

荷印、屋号で生産者を証明・宣伝

ていましたが、生産量が増えたため、この

ブルを囲んで木箱にリングゴを詰めるのです

が、籾殻はリングゴが箱の中でぶつかって傷まないようクッション代わりに入れました。

こうした作業はこの倉庫の裏手に選果のための機械が入る昭和四十年代前半まで続きました。

なお塚田さんによると、昭和四十年代にはリングゴ畑だけで旧更級村には百八十町歩ありました。羽尾地区を通る中央線沿いは当時、一面りんご畑だったそうです。

建物の中で、農協が代わってやるようになったのだそうです。

建物の中は、屋根裏と真ん中に大きな穴のある天井の高い倉庫部からなっています。堀内さんは当時、更級農協の職員で、

その様子を覚えていらつしやいます。堀内

さんによると、屋根裏に米の籾殻を運び入れ、真ん中の穴に大きな漏斗を設置して、下に籾殻を落とす仕組みになっていたそうです。下では四人ほどが籾殻の落ちてくるテー



㊦の荷印は今ももう使われていませんが、農協の裏にはこの荷印のついた木箱がたくさん残っています。個人やグループで箱詰め・出荷までやっていたときの荷印や屋号を刷り込んだ木箱もいくつか見つけました。

（大谷善邦）

おらほの冠着 ⑩

明治の代から引き続いて、冠着山は入会いの山だった。秋から冬はタキギ採り、

夏は草刈りと、年中絶え間なく登りつめた。大正、昭和初期の若い衆は、青年学校か補習学校があつて朝学に出たり、夜学に通ったりしているが、

昼間はせつせと山へ足を運んでいた。

山仲間は若者だけではなく、中年者も老年もまじっている。ひと仕事すんだあと、この先輩たちが羽尾は強清水、仙石は山の神の松の根元や大滝のお宮などの休み場で、種々話をす

る。良いタキギのある所、よい草のある場所を教えたり、山の地形を説いたり、時々の農業の話をしたり、季節の話題から村のしきたりなども話

される。



若者は知らず知らずに、村に生きる知恵を会得する場ともなった。いつしかこれを「冠着大学」と千本柳の衆と羽尾の連中が唱えるようになった。山へ登ることを「大学へ出かける」というわけだ。

考えてみると、こんな名前でもつけなきややりきれなかつたのだ。来る日も来る日も苦業の連続で気も重くなる。それを「大学」と言い換えて、シヤ

レのめして勇気を奮い起こし、力をつけ合つて難業に当たろうという気合いがうかがわれるのである。

「大学」は、当時の社会教育の一面を担い、村形成の一助となり、若い人々の供働の意識の場となっていた。そして、この大学を出て、広い世間にとび出し自力で自立しようという意気盛んな若者を産み出した。一方、村に居残つた若人は、良識ある住民となつて、有力な働き手となつた。

昭和三十年代初め、高度成長の波により冠着大学も終焉を告げた。(塚田哲男)

〔編集後記〕 更級小学校の玄関に対をなして鎮座する二本の杉の大木。仙石の山の神から少し上がった「竜ヶ爪」地籍から切り出したそうです。写真は翠川泰弘さんが撮影しました。奇しくも今春は若宮の佐良志奈神社で七年に一度の御柱祭が催されました。

縄文まつりについてのエッセーをお書きいただいた山本孝子さんは、お隣り、坂城町坂城のお生まれです。五年ほど前、さらしなの里歴史資料館の編み物教室に参加したのを機に友の会の活動にご尽力いただいています。

旧更級村の主産業は、桑畑からりんご畑へと変遷し今に至ります。大正十一年(一九二二)生まれの堀内本啓さんはその歴史を知る方です。この里に数多く残るりんごの大樹にも(さ)の歴史が見てとれます。

冠着大学でも、接木や剪定の仕方など、将来の有望な果実として、いろいろな情報が交換されたのではないのでしょうか。

さらしなの里友の会事務局

〒389-0812

長野県千曲市大字羽尾二四七の一

さらしなの里歴史資料館内

電話026(276)7511

FAX026(261)4161